第 30 回 日本動物児童文学賞審査委員会の会議概要

Ⅰ　日　　時　平成 30 年 7 月 11 日（水）　10：00 ～ 13：00

Ⅱ　場　　所　日本獣医師会会議室

Ⅲ　出 席 者

【委　　員】

動物福祉・愛護部会長

木村　芳之　　日本獣医師会理事（動物福祉・愛護部会長）

動物福祉・愛護関係省庁及び教育関係省庁関係者

則久　雅司　　環境省自然環境局総務課動物愛護管理室長

（代理：田口　本光　　環境省自然環境局総務課動物愛護管理室室長補佐）

清原　洋一　　文部科学省初等中等教育局主任視学官

動物福祉・愛護関係学識経験者

安部　正弘　　公益社団法人日本愛玩動物協会副会長

内山　　晶　　公益財団法人日本動物愛護協会常任理事

須田　沖夫　　須田動物病院院長
　　前一般社団法人家庭動物愛護協会会長

成島　悦雄　　元井の頭自然文化園園長
　　公益社団法人日本動物園水族館協会専務理事

【日本獣医師会】　境　政人（専務理事）

Ⅳ　議　　事

１　委員長の選任（協議）
２　第２次審査に至るまでの審査経過等（説明）
３　審査（協議）
４　その他

Ⅴ　会議概要

冒頭の挨拶として、境専務理事から委員に対して、ご多忙中に 14 作品を精読して第２次審査に協力いただいたことへの感謝と、現在、国会で審議中の動物愛護管理法の改正について本会の考え方等が述べられた。

また、自身の獣医師になるきっかけが小中学校時代に読んだ動物関連の文学作品だったことを思い起こすと、子供達に動物との親しみ、また人間同士の関係にも大きな影響を与えるものなので、優れた作品を選んで欲しい旨述べられた。

１　委員長の選任

事務局から委員長選任について説明後、委員の互選により、木村芳之委員が委員長に選任された。委員長就任挨拶として、この日本動物児童文学賞が子供達に一つの夢を与えるものでありたいと願いつつ、最終審査を進めていきたいので、委員各位のご協力をお願いしたい旨述べられた。

２　第２次審査に至るまでの審査経過等（説明）

事務局から、日本動物児童文学賞事業実施要領、第 30 回日本動物児童文学賞作品募集要項、及び応募状況について説明した。特に、平成 30 年１月１日から４月 20 日までの募集期間で、104 作品の応募があり、第１次審査を作家の井上こみち氏に依頼し、第２次審査候補作品として 14 作品が選出された旨を報告した。

３　審査（協議）

各審査委員による審査候補作品の事前審査結果をもとに、協議の結果、別紙のとおり大賞１作品、優秀賞２作品、奨励賞５作品が選定された。

４　その他

以下の意見があった。

（１）募集要項で原稿文字の大きさを 12 ポイント以上と定めては如何か。

（２）第２次事前審査の採点方法について

ア　絞りきれず迷うので、もう少し点数に幅を持たせられないか。

イ　集計時の比較等、過去の経緯もあり、ここ数年は現状の方法で行ってきた。

ウ　奨励賞候補作品の選出は通常 5 作品だが、上位の大賞・優秀賞候補作品に比べて、バラツキが出て来るので、事前審査で候補に選出するのは、３作品位までにしても良いかもしれない。

エ　次回への検討課題（ア及びウ）とする。

５　ま と め

（１）別紙入賞者のうち、大賞、優秀賞受賞者の表彰は、平成 30 年９月 15 日（土）台東区生涯学習センター　ミレニアムホールにて開催される平成 30 年度動物愛護週間中央行事屋内行事の会場において行う。

（２）大賞及び優秀賞の３作品は、「第 30 回日本動物児童文学賞入賞作品集」として製本のうえ、都道府県等の関係機関、小学校等の教育機関及び図書館等に配布される。

【 別 紙 】

第 30 回日本動物児童文学賞入賞作品

【日本動物児童文学大賞】

「大切な時間」　　マワル　ツタ（奈良県）

＜受賞理由＞

少年が動物病院でアルバイトをして犬を飼うことの大変さ、犬に対する優しさ、責任を学習し、成長していく過程がとても丁寧に描かれており、少年の心の変化と共に最後まで勢いよく読むことが出来る。昨今のペットショップ事情、子犬の流通問題について子供たちに考えさせる内容や、獣医師や動物看護師の動物に対する考え方、動物病院の仕事内容等、多くの子供達に伝えたい内容が紹介されており、動物愛護作品として秀作である。

【日本動物児童文学優秀賞】

「泣き虫だったぼく」　　ゴン太（北海道）

＜受賞理由＞

泣き虫だった少年が助けた子犬と共に生活し、健全に成長していく様子をほほえましく描いている。現実には起こり難い展開も、身近で日常的な設定と背景描写で、読み手を物語にスッと入りこませ、すんなり読める簡潔なストーリーである。また、さり気なくリードの話題や飼い主の責務を感じさせる場面や表現が挿入されている。小学生に適した秀逸な作品である。

「ピイの飛んだ空」　　七ッ樹　七香（熊本県）

＜受賞理由＞

救護したスズメの雛を巣立てるまで育て、自然に返す小学生を描いており、野生動物の保護と対応を冷静な筆致で伝えている。登場人物をよく書き分け、野鳥との関わり方、役所の飼育許可、バッタの足をちぎって与えなければならないことなど、生半可な気持ちでは雛を育てることは出来ないことをきちんと伝えており、最後まで一緒に雛の成長を見守る気持ちになれる。ただし、本作品中での役所の対応が、別の場面でも同様に対応されるとは限らない点や、雛を育てることを是として取られないかという点が若干懸念される。

【日本動物児童文学奨励賞】

「優太の夢」　　西村　一江（山口県）

＜受賞理由＞

自然保護官の母親と野生動物写真家の父を持つ兄弟が、絶滅したとされるニホンカワウソに会う夢を抱く物語である。自然との関わり方、家族の愛情が巧みに織り込まれて

おり、しっかりとした文章構成にも好感がもてる。ただし、動物の福祉・愛護に関するメッセージ性が薄かったのが残念である。

「名前を呼んで！」 **樹　葉（兵庫県）**

＜受賞理由＞

友達が飼育していたダルマインコを飼うことができなくなり預かるという出来事を通して、ペットを事情で飼えなくなった後の問題について考えさせる作品。共同住宅で飼うことの難しさ、外来種の問題など昨今のペット事情が描かれている。学校の飼育小屋で放すことを是と捉えられる等の懸念があるものの、インコを守ろうとする主人公の気持ちは伝わってくる。

「ポニー・ノート」 **村上　あつこ（東京都）**

＜受賞理由＞

人間関係が苦手だった女の子がポニーと出会うことで変わっていく様子が、動物との触れあいと人との触れあいをうまくリンクさせて描かれている。起承転結がとてもうまく、すんなりと馬についての情報も入ってくる。女の子が馬から純粋に感じた想いが鮮明に描かれていて、素直に感情移入できる作品となっている。

「コイの観察日記」 **大谷　誠（大阪府）**

＜受賞理由＞

コイの観察を題材に小学生の男の子が地域の方々と触れあい、地域の歴史や様々な事を周りの大人から学んで成長していく様子が描かれており、話の展開を面白く読ませる文章である。子供向けの内容ではあるが、大人が読んでもどこか懐かしさを感じさせる。ただし、動物福祉・愛護を扱う動物児童文学としては、募集内容との整合性の点において若干違和感が残る。また、コイが外来種であることが残念である。

「ゾウのＴシャツ」 **小野　みふ（東京都）**

＜受賞理由＞

タイ旅行中に購入したゾウのＴシャツから、ゾウと人間の関わり方、野生のゾウが絶滅の危機にあることを学んでいく展開が面白い。人間と共生してきたゾウを取り扱う視点も興味深い。子供達に絶滅危惧種や自然保護について考えさせる内容である。なぜゾウを守らなければならないのかの文章がもう少しあると良い。